

令和 5 年 6 月 20 日現在

機関番号：24506

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2022

課題番号：18K01069

研究課題名(和文) 日中流通拠点遺跡資料に基づく中世土器・陶磁器編年と中世考古学方法論の再構築

研究課題名(英文) Reconstruction of medieval earthenware and ceramics chronology based on artifacts from distribution sites in Japan and China and formulation of Japanese medieval archaeology

研究代表者

中井 淳史(Nakai, Atsushi)

兵庫県立大学・地域資源マネジメント研究科・教授

研究者番号：80411768

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：2020年以降のCOVID-19のパンデミックによって国内外の資料調査が十分に実施できず、計画の変更や縮小を余儀なくされた。そのために中世土器・陶磁器の包括的な編年の構築では課題をのこしたものの、個々の編年の方法論の相違や年代観の齟齬はある程度明らかにでき、土師器についてはその再検討をおこなった。日中流通拠点遺跡の検討は、研究の焦点であった日本からの搬入品の確認には至らなかったものの、堺を中核とした流通をとりあげて方法論も含めた再検討をおこなった。中世考古学の理論・方法論については外国の研究動向を幅広く検討し、現今の土器・陶磁器研究に関わる論点に関して問題提起をおこなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

中世土器・陶磁器の編年相互にひそむ年代観の齟齬の再検討を試みた本研究は、なお解決すべき課題はのこるものの、今後の中世土器・陶磁器研究において重要な方向性を示し得た点で、当該分野における学術的意義はあるものと思われる。また、テキストだけではわからない中世の諸相の解明において、物質文化はきわめて重要である。それゆえにモノを扱う中世考古学は必然的に学際的となるはずであるが、そこで立ち遅れていた理論や方法論、とくにさまざまな歴史資料を扱う上での考え方を提起した点は、より豊かな歴史像を提示する礎にもつながり得る。中世の歴史や文化の社会的関心は高いだけに、本研究成果は相応の社会的意義を持つと考える。

研究成果の概要(英文)：Due to the COVID-19 pandemic, we were unable to conduct sufficient surveys in Japan and China, and we were forced to change our plans. For this reason, although we leave some problem to be solved in the construction of a comprehensive chronology, we could clarify the some questions such as variances of basis and discrepancies in chronological ages between each chronology. Especially, we reevaluated about Haji ware. About the research on medieval distribution sites, we were not able to discover Japanese artifacts at urban sites in Ningbo, which was the focus of our research project, but we could get a chance of reexamining various artifacts excavated from Sakai Kango Toshi site. About the research on theory and methodologies of Japanese medieval archaeology, we have extensively surveyed trends in European research, and have proposed some ideas related to contemporary earthenware and ceramics research in Japan.

研究分野：考古学

キーワード：中世土器・陶磁器 日中流通拠点 編年 中世考古学 方法論

## 1. 研究開始当初の背景

歴史考古学の分野では1970年代以降、開発にともなう発掘調査の急増を背景に続々と発見された中世遺跡から出土した土器・陶磁器の研究が飛躍的に進展した。これは一見すれば歴史考古学があつかう領域の拡大という、学問の自立的な発展のようにみえるが、実際はむしろ大量に出土した中世遺物を報告する必要という現実的な課題からあらわれた結果というほうが実態に近い。そのために研究の最大の関心は遺物から遺跡・遺構の年代を知る方法、すなわち土器・陶磁器編年の整備に集中したように思われる。逆に中世を考古学的に検討するうえでの射程や、さまざまな歴史資料が存在する時代を扱うがゆえの方法論の吟味といった、自立的な学問として備えられるべき理論をめぐる研究は大きく立ち遅れてきた。

中世陶器や輸入陶磁器に関していえば、美術工芸史の分野で伝世品に基づいた厚い研究蓄積があったなかで、出土資料を積極的にとりあげた考古学的研究が志向され、研究は大きく広がった。一方、中世土器はとくに地産地消的に使われた在地性のつよい土器への関心が高まり、1980年代には畿内の瓦器碗や京都の土師器を中心に編年研究が進展した。陶磁器、土器双方で編年研究がとくに進展したが、それぞれ固有の背景があり、研究成果の細部をみればその方法や関心も大きく異なっていた。

いまなお資料の蓄積に地域的偏差はあるものの、現在では全国各地の基本的な様相に関するイメージはおおむね得られつつある。それぞれの地域でどのような土器・陶磁器が展開するのかがおおよそ明らかになった一方で、詳細な暦年代観や地域性の評価といった点ではなお課題が山積している。とくに注目されるのは、土器・陶磁器の編年相互の年代観にひそむズレの存在が明らかになったことだ。これは、陶磁器編年に頼る地域と在土器編年に頼る地域の様相を比較するとき年代の齟齬が生じる原因となり、その解消が次の課題として問われるようになった。遺跡・遺構の暦年代が精緻に把握できればより詳細な歴史の評価ができるわけであるから、これは中世考古学が遺物論を超えてさまざまな中世史の問題へ踏み込むうえでも避けて通れない。地方のさまざまな共伴例をおさえつつ、同時に広域的な視点から各種の土器・陶磁器編年をクロス・チェックし、齟齬を解消する再構築が現下の課題として浮かびあがってきた。

もうひとつは、冒頭で述べた中世考古学の理論や方法論をめぐる問題である。中世という時代を対象とする以上、文献史料をはじめさまざまな歴史資料があり、それらをあつかうさまざまな学問分野が存在する。これら周辺学問分野との対話は中世考古学の議論が独善に陥らないためにも必要不可欠だ。しかしながら、これまでは遺跡や遺構、あるいは遺物の暦年代に関わる評価において安易な古文書・古記録の利用や、文献史学などで構築された理論的枠組みを無批判に導入して考古資料の歴史的解釈を試みるといったような、学問の主体性にも関わる問題がしばしば見受けられてきた。土器・陶磁器編年の暦年代も文献史料から得られた情報が根拠となっている事例も少なくない。考古資料の評価だけにとどまらず、歴史的解釈においても必然的に学際的にならざるを得ない中世考古学であるからこそ、何らかの理論的展望を得ることが喫緊の課題となるのである。

## 2. 研究の目的

以上のような問題意識や背景をふまえ、本研究では以下のように目的を設定した。すなわち、多彩な土器・陶磁器の搬入によって形成される日本・中国の流通拠点(集散地)遺跡の出土資料の分析を通じて、(1)より年代的齟齬の少ない中世土器・陶磁器編年体系の再構築をはかること、そして、その検証作業を通じて、(2)暦年代の比定や資料の解釈においてさまざまな歴史資料と必然的に対峙せざるを得ない中世考古学の自律的な理論や方法論を考察することである。

流通拠点遺跡に注目したのは、これまでの中世土器・陶磁器研究において、モノの動きを如実に示すこの種の遺跡の出土遺物が編年研究においても、また遺物論を越えた歴史的な議論への参画においても重要視されてきた学史上の経緯があるからである。後述するように、京都などの都市遺跡や堺、博多、瀬戸内海沿岸などの流通拠点遺跡には、多種多様なモノが集まったことが古くからよく知られており、その共伴は編年研究の相互検証の素材としても、また流通の様相を明らかにする素材としても重視されてきた。とくに本研究では東アジアの流通拠点遺跡の資料に注目したのが新規の試みである。これまで沈船資料を中心に日本からの搬入品(いわゆる日系遺物)が報告されている。沈船資料だけでなく、その先の流通拠点遺跡まで視野に含めれば、より効果的な問題解決が可能になると考えたからである。同時に、流通をめぐる議論においてもこれまで中国から日本へのモノの流れがとくに注目されてきただけに、逆方向の流れの実態の解明は新しい展開をひらくことができ、ひいては理論や方法に関する議論でも有益な検討材料が得られるのではないかと考えてのことである。

## 3. 研究の方法

本研究は3ヶ年度の期間を設定し、おおむね12～14世紀ごろの日本・中国の流通拠点遺跡(淀川河床遺跡、中国浙江省寧波地区遺跡)を新資料に、加えて京都、堺、博多、瀬戸内海沿岸など既知の国内流通拠点遺跡や大消費地遺跡の出土資料を主な題材とする。具体的には、国内流通

拠点遺跡の資料から、各種土器・陶磁器の搬入や共伴状況、時期的変遷の整理、主要な中世土器・陶磁器編年（具体的には京都産土師器、瓦器、輸入陶磁器、備前焼、瀬戸・美濃焼など）の成果を見直し、それぞれの編年構築方法や暦年代比定根拠を整理し、相互参照や年代的齟齬の実態を明らかにする、中国側の対日貿易拠点として著名な浙江省寧波地区の遺跡から出土した資料を検討し、いわゆる日系遺物の搬入状況を明らかにする、加えて、沈船資料など暦年代比定の容易な中国側資料を集成・検討し、日系遺物の搬入状況に関するデータを得る。これらの検討作業を通じて得られた知見をふまえ、またこれまでの中世考古学をめぐる研究の学史的再検討を通じて、多彩な歴史資料の対峙が不可欠である中世考古学のもつ本来の学際性をふまえ、自立的な学問分野としての理論的射程や考古資料の分析における方法論を考察する。

研究課題のうち、①～③は国内外の資料調査を含むものとして構想したが、令和2（2020）年以降の新型コロナウイルス感染症のパンデミックによって海外渡航や国内移動に大きな制限を受けた。当初の助成期間の2年延長を申請してあつたものの、結果的に大幅な計画変更・縮小を余儀なくされた。

#### 4. 研究成果

については、中世京都の遺跡・遺構の暦年代の主要な根拠として用いられる京都産土師器を主にとりあげた。1980年代以降の研究史を整理して、これまで提示された複数の編年案について、基準資料や年代比定、編年構築の方法について分析を加え、相互の比較検討をすすめた。また近畿地方を対象に、既往の研究の年代観根拠を再検討しつつ、中世の土器・陶磁器様相の概要を整理した（佐藤亜聖・新田和央・中井「近畿」、いずれも中世土器研究会編『新版 概説中世の土器・陶磁器』、真陽社、2022）。土師器に関する成果の一部は、中世日本の土師器生産を包括的に論じた著書（中井『中世かわらけ物語』、吉川弘文館、2022）や論考（同「土師器」中世土器研究会編『新版 概説中世の土器・陶磁器』、真陽社、2022）に反映させることができた。

国内の資料調査も十分に実施することができなかったが、最終年度で堺環濠都市遺跡で出土した遺物を検討する機会が得られた。これは堺市博物館から特別展への企画協力を依頼されたもので、研究代表者・分担者がこれに加わって堺を舞台とした中世流通の考古学的研究の成果について検討した。流通をめぐる考古学的議論の方法的課題や、大阪湾岸をめぐる流通に関する成果を特別展図録の論考にまとめることができた（堺市博物館編『人とモノが行き交う中世・堺 - 流通の考古学 - 』、2023）。

このほか、に関連した派生的な研究として、播磨西部地域の土師器資料を検討する機会を得た。播磨東部や備前、瀬戸内東部など周辺地域の資料とも比較しながら、個々の資料の先後関係や当該地域の土師器様相の変遷過程、特色について明らかにすることができた（同「上郡町域の中世土師器」『ひょうご歴史研究室紀要』8、兵庫県立歴史博物館、2023）。

については、助成期間の初年度および第2年度に浙江省寧波市での資料調査を実施した。寧波市考古文物局および保国寺古建築博物館の研究者の協力を得て、寧波城内出土資料の調査をおこなった。また、訪問時に寧波市が実施していた寧波城西門地区発掘調査現場の見学や出土遺物の検討、また上林湖越窯博物館所蔵の越州窯青磁の調査もおこなった。第2年度は寧波市文物考古研究所を訪問し、和義路遺跡、慶元路永豊庫遺跡の出土資料を調査した。調査の主眼は出土遺物の全体像を把握したうえで、中国製陶磁器の組成などに関する詳細な把握や日本製土器・陶磁器の探索にあった。あわせて中国側研究者との意見交換をおこなう機会も得て、中国製陶磁器の状況や年代観などについて一定の知見や情報を得ることができたが、本研究が当初の目標とした、日中交流の検討や暦年代比定を考えるうえで必要な資料（日本製の土器・陶磁器）の発見には至らなかった。継続調査を期していたが、残念なことに第3年度以降はパンデミックのために渡航が困難となり、2回（2年）にわたって助成期間の延長を申請して実施を期したものの制限状況は改善せず、結果として調査を中断せざるを得なかった。当初の目的は果たせなかったものの、2回の調査を通じて中国側の調査研究事情についてある程度の情報収集ができた点はひとつの成果といえようか。また、中国では日本製品についての認識や搬入品に対する意識が十分に浸透しているとはいいがたい状況も明らかになった。中国側の調査において、報告すべき資料として十分に認知されていなかった可能性も考えられる。日中の交流を深化させて中世東アジアの土器・陶磁器に関する相互理解を深めてゆくことや、細片資料に至るまでの詳細な調査の必要性を今後の課題として認識した。

については、日本における中世考古学研究、とくに土器・陶磁器研究について学史的再検討をおこない、とくにその学際性の局面における問題点と方法論に注目して問題点の整理・検討をすすめた。あたらしい観点の理論や方法論の提起においては、ほかの学問分野や海外の中世考古学研究の動向を把握することも重要である。周辺分野における議論の学史的把握とともに、学問領域としての「中世考古学」がすでに一定の位置を占めているイギリスをはじめとしたヨーロッパ、成立の事情から独自の理論や方向性を志向したアメリカの歴史考古学を対象に、おおむね90年代以降の主として理論的課題をあつかった海外文献の収集・検討をおこなった。海外においても考古学と歴史学（文献史学）の関係は学史的にも重要な論点で、さまざまな議論が展開されてきたが、近年ではその枠組みにとらわれず、人類学や社会学と積極的に切り結び、その視座や方法を大胆に導入しようと試みる研究もあらわれている。そのために海外の研究動向の調査は多岐にわたり、助成期間のなかですべてを十分に把握しきれなかったところもあるが、日本の研究で学史的に焦点となってきた文献史学との関わりという問題については、当初想定した課題に

ついておおよその見通しを得ることができた。これについては、土器・陶磁器研究の理論と方法に関する試論としてまとめた(中井「中世土器・陶磁器研究の方法と課題」中世土器研究会編『新版 概説中世の土器・陶磁器』、真陽社、2022)。また、前述の中世日本の土師器に関する著書にもその成果や知見を反映させることができた(前述『中世かわらけ物語』、2022)。

このほか、学際性という論点に関連した実践的な研究という位置づけで、中世土器・陶磁器の使用における文化的問題を取りあげることとし、室町・戦国時代の儀礼の場における饗宴を素材にそこで使用される土器・陶磁器の傾向を把握し、歴史的な解釈を試みた(中井「饗宴の食事と食器 - 15・16世紀の事例から - 」『史林』106-1、2023)。中世土器・陶磁器研究においてかつて盛んに論じられた食器様式論の経過や到達点を再検討したうえで、その観点で把握しきれない文化史的な論点として饗宴の食事を取りあげ、そこでの使用を明らかにしたものである。

以上、中世土器・陶磁器全体をみわたした包括的な編年の構築という点ではなお課題をのこす結果となったが、それぞれの編年が抱える構造や問題点については、研究代表者と分担者が編集委員として参画した中世土器・陶磁器概説書の企画編集作業において、執筆を依頼した各地の研究者と意見交換をおこなう機会をつくることができ、その成果の一端を編集方針に反映させることができた(中世土器研究会編『新版 概説中世の土器・陶磁器』、真陽社、2022)。一方で、日中流通拠点遺跡の検討については、焦点となる日系遺物(日本からの搬入品)の確認・検討は達成できず、積み残した課題となってしまった。しかしながら、その前提となる基礎的な情報の収集・把握はある程度果たすことができたため、今後に期したいと考える。中世考古学の理論・方法論については、編年研究や流通拠点遺跡の検討をふまえた問題化という点でなお課題や検討の余地がのこったものの、国内外の研究動向を幅広く検討することができ、既往の論点を中心に、若干の再検討や問題提起を成し得た点は成果のひとつとしてあげることができる。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計9件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 中井淳史	4. 巻 1
2. 論文標題 土師器	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『新版 概説 中世の土器・陶磁器』	6. 最初と最後の頁 171-186
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中井淳史	4. 巻 1
2. 論文標題 中世土器・陶磁器研究の方法と今後の展望	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『新版 概説 中世の土器・陶磁器』	6. 最初と最後の頁 385-396
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中井淳史・佐藤亜聖・新田和央	4. 巻 1
2. 論文標題 近畿	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『新版 概説 中世の土器・陶磁器』	6. 最初と最後の頁 89-100
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 佐藤亜聖	4. 巻 1
2. 論文標題 畿内産瓦器椀	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『新版 概説 中世の土器・陶磁器』	6. 最初と最後の頁 187-200
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 佐藤亜聖	4. 巻 1
2. 論文標題 東播系須恵器	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『新版 概説 中世の土器・陶磁器』	6. 最初と最後の頁 219-230
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中井淳史	4. 巻 106-1
2. 論文標題 饗宴の食事と食器 --一五・一六世紀の事例から--	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 史林	6. 最初と最後の頁 73-106
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.14989/shirin_106_1_73	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中井淳史	4. 巻 8
2. 論文標題 上郡町域の中世土師器	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 ひょうご歴史研究室紀要	6. 最初と最後の頁 85-101
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中井淳史	4. 巻 1
2. 論文標題 中世土器・陶磁器から何がわかるか	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『人とモノが行き交う中世・堺 - 流通の考古学 - 』	6. 最初と最後の頁 44-49
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 佐藤亜聖	4. 巻 1
2. 論文標題 土器から見た中世後期の大阪湾岸流通	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『人とモノが行き交う中世・堺 - 流通の考古学 - 』	6. 最初と最後の頁 54-57
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件 (うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 佐藤亜聖
2. 発表標題 中世後期の流通
3. 学会等名 シンポジウム「中世の流通と堺」(堺市博物館)(招待講演)
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 中井 淳史	4. 発行年 2021年
2. 出版社 吉川弘文館	5. 総ページ数 304
3. 書名 中世かわらけ物語	

1. 著者名 中世土器研究会編(中井・佐藤が編集委員に参画)	4. 発行年 2022年
2. 出版社 真陽社	5. 総ページ数 426
3. 書名 新版 概説 中世の土器・陶磁器	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	佐藤 亜聖  (Sato Asei)  (40321947)	滋賀県立大学・人間文化学部・教授    (24201)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関